

日時 10月3日（金）12:30～14:30

会場 奈良県橿原文化会館 小ホール

日本国の始まり その時代を生きた女性たち

分科会2は、古代衣装を身に纏った奈良大学文学部国文学科の学生たちの司会で幕を開けました。各講演の前後に講演者の紹介や自身の感想を交えたまとめを述べるなど工夫を凝らした進行により、分科会は最後までスムーズに開催することができました。

また、講演では、1300年前の日本女性の実像を歴史学や文学の研究から紐解き、現代女性と比較することで、ジェンダー問題の社会的背景を考察するなど、古代の多様な女性像を明らかにしました。

登壇者

講演：鈴木 喬（奈良大学 文学部国文学科 准教授）

渡辺 晃宏（奈良大学 文学部史学科 教授）

司会：奈良大学文学部国文学科 学生



講演①「万葉集に見る古代の女性たち」

鈴木 喬

1. 講演の概要と現代のジェンダー認識

まず、現代の日本語に根付くジェンダー的な発想について考察します。例えば、「男だから泣かないの」という教えや、男性の意気地がない様子を指す悪口としての「女々しい」という言葉は、女性に対してはあまり使われないこと、また、「愛妻家」という言葉はあっても、「愛夫家」という言葉がほとんど使われない背景には、「妻は夫を愛するもの」という前提があり、妻を思う夫が褒められる一方で、女性の側が評価されないという言葉の運用がなされてきました。



しかし、このような現代の言葉に存在するジェンダー的発想は、古代の万葉集に見る女性たちの実像とは異なる様相を示しています。万葉集の歌は、男性貴族、女性貴族、そして女性天皇によって歌われており、その中には女性が男性よりも上の立場で歌を歌う表現が存在します。

2. 万葉集の歌風「ますらをぶり」の再評価

万葉集は、かつて「ますらをぶり」と呼ばれ、おおらかで男性的な歌風、雄々しい姿になぞらえたものとされてきました。一方で、対になる「手弱女ぶり（たをやめぶり）」は、古今和歌集をはじめとする勅撰集の、洗練された優艶で柔和な女性的な歌風を指すものとされてきました。これらの概念は、江戸時代の国学者が提唱したもので、現代の学校教育の補助教材にも残っているものです。

しかし、万葉集の研究においては、「ますらをぶり」で万葉歌を評する研究者は現在一人もいません。その理由として、万葉集には現代でいう「女々しい」感覚の歌や、平安時代のような雅でむしろ女性的な歌が多々含まれていることが挙げられます。

「ますらを」が奈良時代には五位・四位の律令官人を指し、大君や朝廷に奉仕する男性像であったのに対し、「たわやめ」は「手が弱い女」「力が弱い女」という非力な女性像を漢字表記からも見て取ることができます。実際に万葉集の歌にも「たわやめだから泣いてしまうのだ」という、力が弱い女性はすぐ泣いてしまうというステレオタイプな理想像に基づく表現が見られます。

一方で、強健な「ますらを」でも恋によって「ずっと後悔している」「正気な心が今はない」「今にも死にそうだ」といった心情を歌い、恋のために泣いてしまう男が表現されます。これは、ジェンダー的な固定観念を踏まえながらも、それを転換し、あなたを想う恋心がジェンダーを超えて強いのだと歌っていると言えます。

3. 「待つ女」像と通い婚の文芸性

万葉集における女性像としてしばしば挙げられるのが「待つ女」です。これは、古代の婚姻形態が、男性が女性の家に通う通い婚を前提としていたため、女性が男性の訪れを待たねばならなかったことに起因します。

額田王の有名な歌「君待つと 我が恋ひをれば 我が宿の 簾動かし秋の風吹く」は、「あなたのお出でを恋しく待っていると、簾を動かしたのが冷たい秋の風であった」という、待ちわびる様子を繊細に表現したものです。また、万葉集巻二の巻頭に置かれた磐姫皇后の歌「君が行き 日長くなりぬ 山尋ね 迎へか行かむ 待ちにか待たむ」は、恋の歌の始まりとして、愛しい人の帰りを「待っていようか、それとも迎えに行こうか」と女性が逡巡する気持ちを描き出しており、「待つ女」の姿が万葉集の編纂時に一つの美的感覚として定着した側面も示唆されています。

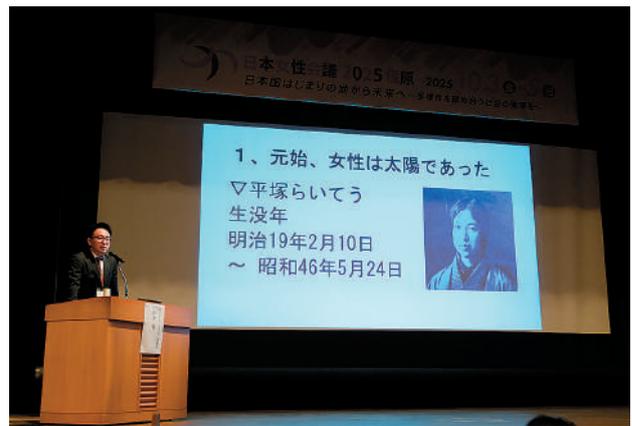
しかし、この「待つ」という行為は、ただ耐え忍ぶだけの暗い影を成しているのではなく、女性でしか歌えない感性や肌感覚を表現し、文芸としての良さを伝えるものとして成立しています。

4. 神話に見る女性の主体性と女帝の姿

日本の神話の最高神であるアマテラス（天照大神）は女神です。イザナキ・イザナミよりも最上の神が女神であるという事実は、古代においては男性と女性に対等な関係であったからこそ認められたものであり、女性蔑視の意識があったならば決して認められなかっただろうと考えられます。アマテラスは、黄泉の国から帰ったイザナキが左目を洗った時に誕生し、高天原の統治を命じられ

ています。岩戸隠れの神話に見るように、神様の世界と人間の世界の秩序の中心であり、男装して弟スサノオと対峙する姿は、弱々しいたわやめではなく、為政者として立派な柱の像として描かれています。

また、国造りの神であるイザナミが火の神を産んで亡くなった際、夫イザナキは「私とお前が造った国はまだ造り終わっていない。だから帰ってきてほしい」と妻に話しかけます。これは、現代的な「寂しい」という感情ではなく、「仕事（国造り）が途中だから」という理由であり、夫が妻を国造りの対等なパートナーとして見ていたことを示しています。



万葉集の歌人である持統天皇もまた、「待つ女」の枠には収まらない、主体的な女性の象徴として挙げられます。持統天皇の歌「春過ぎて 夏来るらし 白たへの 衣干したり 天の香具山」は、高らかに季節の到来を歌い上げるものであり、単なる叙景歌ではありません。古代では、天皇が良い政治を行うことで季節が正しく巡航すると考えられていたため、この歌は持統天皇自らの政治的な意図、すなわち「良い政治を行っている」というメッセージを込めた天皇像を表現していると解釈できます。

5. 和歌の成立における女性の役割と歌人の主体性

『古今和歌集』の仮名序には、和歌は「男女の仲をも和らげ」、「この歌天地のひらけ初まりける時よりいできにけり」と記されています。さらに古い注釈では、和歌はイザナキ・イザナミの夫婦神が誕生した時から始まったとされており、女性が活躍しなければ歌の文化は成立しなかったことが示唆されます。実際、万葉集の歌の半分以上が恋歌の形式をとっており、女性が活躍しなければ和歌、あるいは極端に言えば日本文化は今の形にはならなかったと言えます。

また、宴会の場で葛城王（橘諸兄）が怒っていた際、采女（うねめ）の歌「安積山 影さへ見ゆる 山の井の 浅き心を 我が思はなくに」によってその心が慰められた例が残されています。これは、女性の歌が男性の心を慰める場面であり、女性が男性の光に照り輝く依存的な存在では決していないことを示しています。

最後に紹介された狭野弟上娘子（さののおとがみのおとめ）の歌は、女性の主体性を力強く示しています。夫が島流しになった際、彼女は「君が行く 道の長手を 繰り置ね 焼き滅ぼさむ 天の火もがも」（夫が旅をする長い道を、手繰り寄せて焼き滅ぼしてしまいたい。そんな天の火が欲しい）と歌っています。これは、取り残された「待つ女」でありながら、ただ耐え忍ぶだけではなく、夫の苦難の道を焼き滅ぼしたいという強い願いを表現しており、女性の力強さがそこに明確に見える事例です。

6. 結び

平塚らいてうの有名な一節「元始、女性は太陽であった」からも、女性の解放を説いた平塚氏のメッセージと古代の女性像を重ね合わせることができます。万葉集の女性たちは、一人ひとりが輝く太陽のように歌が輝いており、男が上、女が上といった優劣の関係ではなく、対等な存在であっ

たこと。そして、女性が活躍しなければ、日本の和歌の文化自体が成立しなかったということがわかります。

古代の女性たちは、現代の固定観念やステレオタイプに囚われることなく、強い主体性と独自の感性をもって、政治や文芸といったあらゆる分野で、主体的に輝く「太陽」のような存在であったと言えます。

講演②「古代の女帝について」

渡辺 晃宏

1. 講演の概要

古代の女帝について、一般的には男系直系の継承を維持するための中継ぎ的な存在として広く理解されてきたという従来の説に疑問があります。古代の女帝は、推古天皇から称徳天皇までの8代に集中して出現しており、9世紀以降は途絶えます。この現象を中継ぎ説だけでは説明できません。女帝の政治的な実態や、当時の大和王権の王のあり方、さらには古代社会における男女の性差の認識にまで遡って、その存在意義を再評価すべきです。特に、女帝の集中は古代社会の特性と深く結びついており、彼女たちが単なる中継ぎではなく、一時代を築き上げた実力者であったことが具体的な事例を通してわかります。



2. 古代における王位継承の原則

古代の大和王権における王（後の天皇）のあり方について、近年の古代史研究の一般的な理解として以下の点が挙げられます。

- 終身の任期：一度王になったら、基本的に死ぬまで王位にある終身の任でした。
- 後継者の決定方法：先代の王が活着している間に後継者を定めることは基本的に行われず、王が亡くなった後に、王権を支える豪族たちの代表者が協議して後継者を決定していました。
- 資質の重視：後継の王には、人格的に優れ、指導力を持つ熟年の者であることが絶対条件でした。20代や30代では若すぎると考えられていました。
- 譲位の発生：活着している間に王位を譲る「譲位」は基本的になく、最初の事例は645年の乙巳の変（大化の改新のクーデター）後の皇極天皇の退位でした。
- 皇太子制度の未確立：王位継承者をあらかじめ定める皇太子制度は未確立でした。明確に出来上がるのは7世紀終わり近くの飛鳥浄御原令からであり、それも奈良時代を通じて不安定な状態が続いたと考えられています。

この原則から、古代においては必ずしも男系の直系継承が自明のことではなかったことがわかります。推古天皇の世代から称徳天皇の世代までの天皇19代のうち、女帝は8代を占めており、女性と男性の比率が半々に近い状態が続いていました。

3. 女帝以前の女性のリーダーと古代社会の特性

推古天皇以前にも、女性のリーダーが存在した可能性があります。

- 邪馬台国の女王：『魏志倭人伝』に記された卑弥呼やその後の台与の存在は、女性のリーダーが珍しくなかったことを示します。
- 考古学的裏付け：古墳に葬られている首長の男女比率を調べると、女性が3割から5割に及び、女性の首長が普遍的に存在していたことが明らかになっています。
- 飯豊王の存在：古事記にはないものの、日本書紀では飯豊青尊（飯豊王）が実質的な大王として大和王権を導いた役割が描かれています。後の歴史書『扶桑略記』では一代の天皇に数えられており、年長の女性が王位継承に関与し、王にもなり得たことを示しています。
さらに、古代の社会は双系的な社会であったことがわかっています。
- 双系性の重視：父系と母系、男系と女系のどちらも重視され、男女の性差は基本的にあまりなかったと考えられています。
- 婚姻形態：王とその妃は別居するのが原則で、夫が妻方を訪ねるといった訪問婚の形態が一般的でした。
- 称号の平等：社会的に男女は基本的に平等であり、称号においても男女の区別はなかったと考えられています。
こうした双系性の社会の下では、実力のある女性が王位に就くことは、決して特別なことではなかったと言えます。

4. 古代の主要な女帝たちの実像

古代の女帝は、単に中継ぎとしてではなく、強力なリーダーシップと実力をもって政治を主導しました。

◆推古天皇（額田部皇女）

- 即位事情：欽明天皇と蘇我稲目の娘である堅塩媛の間に生まれ、天皇家と蘇我氏を結ぶ接点に位置しました。
- 実力と役割：蘇我馬子とともに王位継承に大きな役割を果たし、崇峻天皇暗殺後に39歳で即位。
- 長期の在位：36年間にわたり大王の位にあり続け、その存在形態は、終身の任であったそれ以前の大王のあり方をそのまま体現していました。中継ぎではなく、実力を評価されて大王になったと考えるべきであるとされました。
- 聖徳太子：厩戸皇子（聖徳太子）の皇太子制度への関与は、日本書紀の脚色である可能性が指摘されました。

◆皇極天皇（斉明天皇）

- 即位事情：夫の舒明天皇の死後、群臣に推戴されて即位。
- 権力構造：乙巳の変後、弟の孝徳天皇が即位し難波へ遷都しますが、退位した皇極は皇祖母尊という最大限の尊称で呼ばれ、孝徳とともに権限を行使する協力体制を築いていた可能性が示唆されました。
- 重祚と活躍：孝徳の死後、飛鳥に戻り斉明天皇として重祚（再即位）。大規模な土木工事



や、百済救援のために自ら北九州へ出向くなど、単なる中継ぎ以上の強力なリーダーシップを発揮しました。

◆持統天皇（鸕野讚良皇女）

- 権力の確立：天武天皇の正妻。夫の死後、天武天皇のやり残した事業を完成に導き、律令の編纂（飛鳥浄御原令）と藤原京の完成を成し遂げました。
- 譲位と太上天皇：自身の系統への確実な王位継承を見届けるため、日本独自の制度として太上天皇（上皇）を創設し、孫の文武天皇を支えました。太上天皇は、退位後も天皇権を分称する存在であり、その考え方が大宝令に色濃く反映されています。
- 律令国家形成への貢献：律令国家の完成形態は持統天皇の存在なくしてはあり得ず、その役割は夫の天武天皇以上であったと高く評価されています。

◆元明天皇・元正天皇

- 元明天皇：持統天皇の妹。子の文武天皇の死後、即位。
- 主要な業績：平城京への遷都（710年）を主導し、その完成を導きました。これも単なる中継ぎ以上の業績です。
- 元正天皇：元明天皇の娘。将来の聖武天皇（首皇子）への継承のための中継ぎという役割も否定できませんが、その資質は高く評価されていました。元正天皇が独身のまま置かれたのは、持統天皇が後の継承を見越して計画したものかもしれません。

5. 古代の女帝が集中した理由と終焉

古代に女帝が集中して出現したのは、当時の日本の社会が男女の性差が少なく、実力があれば男性と変わらず活躍できる双系性社会であったことが大きく影響しています。また、天皇の位についても男系の直系継承は当てはまらず、女性が即位する可能性が高かったためです。

しかし、持統天皇の時代に完成した律令国家は、中国の男系家制度に基づく制度を取り入れており、これにより日本の社会にも男系優先の考え方が徐々に根付くようになりました。国家の制度上、男系中心の社会が出来上がりつつある中で、幼い天皇でも即位できるようになり、わざわざ実力のある女帝を立てる必要性が薄れていきました。

その結果、孝謙（称徳）天皇が古代最後の女帝となります。彼女は唯一、皇太子になって即位した女帝であり、それまでの女帝とは性格を異にしています。

分科会2 提言

古事記神話や万葉集といった文芸作品から、また古代の女帝たちの実像を通し、日本国始まりの時代における女性の在り方を明らかにしました。歴史に学ぶことの重要性和、能力による活躍、女性だからこそできることを提言しました。

